

同一性の相対性と個体の多元性

横路 佳幸 (Yoshiyuki Yokoro)

南山大学社会倫理研究所／日本学術振興会

本発表の目的は、いわゆる種別的同一性 (sortal sameness) が通常の数的同一性関係とどのような関係にあるのかを整理しながら、分析形而上学における多元論 (pluralism) ——時空的に一致する二つ以上の個体の存在を認める見解——を擁護するための新たな論拠を提出することである。

種別的同一性とは、個体 x と y にくわえて種別概念 (sortal concept) F を項として含む三項関係を指し、形式的にはそれは「同じ F である (the same F)」として表現される。ある個体どうしの中に種別的同一性が成立するかどうかは、猫や彫像、河川などから成る種別概念によって与えられる規準によって決定され、その規準は各種別概念によって多様である。

これまで、種別的同一性がどのような特徴を持ち、さらにそれが「=」によって表現される通常の数的同一性とどのような関係にあるのかについては、様々な理論が提示されてきた。種別的同一性の特徴を述べる見解としてよく知られるのは、ロック主義と反ロック主義の二つである。ロック主義によると、種別概念 G に属し同じ F である個体は同じ G ではないということはありうる。たとえば、(通時的に) 同じ河川である個体は水分子の塊に属するとしても同じ水分子の塊ではない。これに対し反ロック主義は、ロック主義を否定して、種別概念 G に属し同じ F である個体は同じ G でなければならないと論じる。

他方で、種別的同一性と同一性の結び付きを実質的に明らかにする見解としては、少なくとも次の四つを挙げることができる。一つ目は、ピーター・ギーチによって提唱された同一性の相対主義である。これによると、同一性は同じ F であることの省略にすぎないものとして種別概念に相対化される。二つ目は、デイヴィッド・ウィギンズによって提唱された同一性の種別論的な絶対主義である。これによると、同一性はいかなる種別概念に対しても絶対的ではあるものの、その関係項となる個体が同じ F であることと密接に関係する。三つ目は、マイケル・バークによって示唆された顕性種別概念を用いた戦略である。これによると、同一性は種別概念の中でも顕性種別概念が与える同じ F の規準によって説明される。四つ目は、マイケル・レイによって提唱された同一性抜き種別的同一性の戦略である。これによると、同じ F である個体が数的に同一でないことはありうる。

本発表では、種別的同一性と同一性の関係をめぐり上記四つの理論の共通点と相違点を明確にする。その際、「フレーゲの分析」と「普遍的な種別論」と私が名付ける二つ

の原理を基軸として、それら理論を細かく分類する。その結果次の三点を明らかにする。第一に、同一性の相対主義と顕性種別概念を用いた戦略は、同一性の種別論的な絶対主義が維持しようとするフレーゲの分析を拒絶してしまう。第二に、同一性抜きでの種別的同一性の戦略は、同一性の相対主義と同一性の種別論的な絶対主義が維持しようとする普遍的な種別論を拒絶してしまう。第三に、フレーゲの分析と普遍的な種別論を置くと、ロック主義は論理的な矛盾を招いてしまう。以上から、フレーゲの分析と普遍的な種別論の措定は無条件に、反ロック主義と同一性の種別論的な絶対主義を導くと示す。しかし、フレーゲの分析を維持する際、同一性の種別論的な絶対主義は、異なる種別的同一性の規準に従う二つ個体は仮に時空的に一致するとしても同一ではないと論じ、一致のパラドクスなどで提唱されてきた多元論に不可避にコミットせねばならない。したがって、分析形而上学における多元論を擁護することは、様相的性質の違いと同一者不可識別の原理から一致物の数的差異性を導く従来の論拠に一切頼ることなく、フレーゲの分析と普遍的な種別論の妥当性から可能であると結論付ける。